立命館人間科学研究，25，67-80，2012.

研究論文（Articles）

ひきこもる若者の語りに見る“普通”への囚われと葛藤[1)]

――ひきこもる若者へのインタビュー調査から――

岡部　茜[a)]・青木秀光[a) 2)]・深谷弘和[a)]・斎藤真緒[b)]
（立命館大学大学院社会学研究科[a)]・立命館大学産業社会学部[b)]）

Lived Experience of HIKIKOMORI and Their Conflicts

OKABE Akane[a)], AOKI Hidemitsu[a)], HUKAYA Hirokazu[a)], SAITO Mao[b)]
（Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University[a)]/
College of Social Sciences, Ritsumeikan University[b)]）

HIKIKOMORI–social withdraw–has been a significantly eye-catching issue in contemporary Japan. The purpose of this article is to elucidate the ongoing process of being HIKIKOMORI through discourse with the young to understand the internal HIKIKOMORI life. This investigation consists of semi-structured interviews with 9 young people living the HIKIKOMORI lifestyle, and answers were analyzed based on the Modified Grounded Theory Approach（M-GTA）. We made a hypothetical chart of the HIKIKOMORI process using this analysis. In addition, we focus on the fact that young HIKIKOMORI often have the thought “I should be on *normal*” and we analyzed some of the conflicts resulting from that. As a result, we found that young HIKIKOMORI would be able to free themselves from the thought of “I should be *normal*” little by little, if they eventually are able to cope with the idea of *normal*.

Key Words : HIKIKOMORI, normal, narrative, process, M-GTA
キーワード：ひきこもり，普通，語り，プロセス，M-GTA

1　はじめに

1-1　本研究の関心と目的

内閣府（2010）によって「ひきこもり」とされる若者が約70万人いると推定されることが示され，現代日本社会においてますますひきこもり支援が重要な課題となっている。しかし，このような調査で想定されてきた定義では，十分にひきこもる若者たちの内的な世界まで捉えることはできない。

例えば，内閣府の調査において用いられた「ひきこもり群」の定義は，あくまで便宜的かつ操作的定義であり，「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」（以下，ガイドラインと表記）（厚生労働省，2010）の定義も診断クライテリアを示したものにすぎない。

1）本研究は，立命館大学大学院社会学研究科先進プロジェクト研究SG「韓日若者支援比較研究」および平成21年度～23年度科学研究費補助金基盤研究（C）（代表者 山本耕平）の成果の一部である。
2）現立命館大学大学院先端総合学術研究科

このような統計上のいくつかの状態像としての定義や，診断クライテリアからは，ひきこもる若者が社会に主体的に参加していくことを支援するために必要となるような，ひきこもりつつ生活する彼らの葛藤や苦悩，そしてその生活に見出される彼らの力強さを十分に感じる取ることができない。ひきこもる若者の葛藤や力強さを彼らの生活に見出していくためには，若者がひきこもる意味を問う視点を持ちながら，彼らのひきこもるプロセスを検討していく必要があるのではないだろうか。また，彼らに適切な支援の充実を考えるためにも，内的世界に注目して，ひきこもるプロセスを検討することが重要となる。

そのため，本研究においては，今一度彼らの内的な世界に注目し，今回協力してくれたＡ県にある地域若者サポートステーションと，支援機関Ｂの利用者の語りを分析することによって，便宜的かつ操作的にではなく，内的なひきこもりの経験を理解することを目的とする。なお，今回のインタビューの分析の全体像については，「ひきこもり事例効果的アウトリーチ確立」に関する研究グループ（2011）に詳しいが，本稿は，この分析をさらに詳しく検討したものである。

1-2　本研究におけるひきこもりの仮説的定義と背景理論

本調査では，山本（2005）にのっとり，ひきこもりを「青年期に生じる同一性獲得不全に伴う発達危機の一形態であり，その危機は，人生を規定する経済や文化・価値等の社会的背景，思春期以降の青年の発達や生活を規定する社会システム（学校・家族・地域）の変容との関わりで生じる。社会との交流を絶ち一定期間の自宅・自室へのひきこもりであるが，統合失調を伴わないもの」と仮説的に定義してきた。この定義は，ひきこもりを病理的にとらえる限定的なものではなく，現代の若者が抱える困難さをとらえようとするものであり，今回のインタビュー協力者の分析にも有効であると判断した。

この定義の理論的背景は，ひきこもる若者達の多くは，他者との関係性を紡ぐことが困難であることに由来し，Erikson（1959）を理論的根拠としている[3)]。

1-3　先行研究に見るひきこもりプロセス

ひきこもり研究のなかには，ひきこもりを過程として捉え，検討を進めているものがある。例えば，診断クライテリアを定義として示しているガイドラインでは，ひきこもりのプロセスを，①身体症状や精神症状，問題行動などが目立つが，実際にひきこもってはいない「準備段階」，②激しい葛藤が顕在化し，家庭内暴力などの不安定さが目立つ時期である「開始段階」，③ひきこもり開始期の不安定さがひとまず治まるが，回避と退行が前景にでている「ひきこもり段階」，④試行錯誤しながら外界との接触が生じ，活動が始まる時期である社会との「再会段階」の４段階に分けてとらえ，段階ごとに彼らの状態を把握し，支援方法を考えていくことの重要性を述べている。他にも，社会的ひきこもり当事者の心理を分析テーマとしてひきこもりの心理的要因を分析している草野（2010）や，ガイドラインが示すプロセスが「あくまで状態像の変化を，『精神障害』の様相として，外から，記述したもの」にすぎないと批判し，ひきこもるプロセスには固有のテーマがあると指摘する芹沢（2010）の研究が挙げられる。

このように，ひきこもりのプロセスをそれぞれの視点から捉えることによって，段階ごとの特徴をとらえ，支援実践の向上に貢献しようと研究が進められてきた。ひきこもりをプロセスとしてとらえることによって，私たちは，生活

3）詳しくは，本研究の土台となっている「『ひきこもり事例効果的アウトリーチ確立』に関する研究報告書」p.34 を参照。

者として葛藤する，一人ひとりのひきこもる若者に出会うことができ，そこに葛藤や苦悩，そして彼らの持つ力強さを見出すことができるのである。

そのため本稿においても，ひきこもる若者と，その周囲の人々との関係性や社会・文化的な背景に注目し，彼らの内的なひきこもる意味の分析に主軸をすえ，ひきこもるプロセスの分析を行い，考察を進める。

2　研究方法

2–1　調査対象・方法

調査は，A 県にある地域若者サポートステーションと，支援機関 B の利用者，計 9 名を対象とし，2010 年 11 月から 2011 年 1 月の期間に行った。インタビュー協力者の内訳は以下の表の通りである。

表 1．インタビュー協力者内訳

氏名	年　齢	性別	学　歴	利用機関
A	35 歳	男	高校卒業	サポステ
B	23 歳	男	高校中退	サポステ
C	36 歳	男	専門学校中退	サポステ
D	36 歳	男	高校卒業	サポステ
E	39 歳	男	大学卒業	サポステ
F	31 歳	男	専門学校卒業	サポステ
G	36 歳	女	高校卒業	サポステ
H	21 歳	女	高校卒業	サポステ
I	27 歳	男	高校中退	支援機関 B

このインタビュー調査では，一定の質問項目を決めておき，インタビュー対象者の語りに沿ってインタビューを進める半構造化面接の手法で，幼少期から発達史にそって彼らのライフイベントや生きづらさを中心に聞き取りを行った。インタビュー場面においては，インタビュアーが語り手の発話を阻害し，作為的にインタビューを統制することがないよう桜井（2002）を参考にインタビューを実施した。また，インタビューは 1 時間から 1 時間半程度行い，協力者の許可を得て IC レコーダーで録音し，逐語録を作成した[4)]。

本調査の協力者はサポートステーション利用者が大半をしめているため，本分析の対象が，就労に向かいつつある若者であったことは，本稿の限定性として挙げられる。

2–2　分析方法

本研究の目的は，ひきこもりという経験を内的な意味の世界に注目して捉えていくことである。そのため，内面的な意味の世界の解釈を重視する質的研究の立場をとる。なかでも，プロセス的性格を持つ事象についての分析に適しており，加えて実践に応用できるようにある程度概念化を可能にし，分析のための具体的手順が明示化されている M–GTA に基づいて分析を行った（木下，2003）。

また，「ひきこもり事例効果的アウトリーチ確立」に関する研究グループ（2011）の段階では，山本（2009）のアセスメント基準や社会的ひきこもり事例の障害形成過程を参考にし，インタビューを分析するなかで分析テーマを①「ひきこもる若者が親とのストレスフルな関係を認識し，その関係から逃れる力を獲得するプロセス」，②「ひきこもる若者が，自身が同年齢の仲間と関わりあいづらいと認識するできごととその時期」，③「同年齢集団否定のなかで生じた生きづらさの認識」，④「ひきこもる若者が，社会とのつながりや就労さらには自立を自己の課題として認識するプロセス」の 4 つに設定したが，さ

4）また，本研究においては，インタビュー開始前に，紙面と口頭の両方においてインタビューの拒否や録音の拒否ができること等を確認し，倫理的側面の配慮を心掛けた。加えて，本調査は，立命館大学における人を対象とする研究倫理審査委員会の承認を受けている。

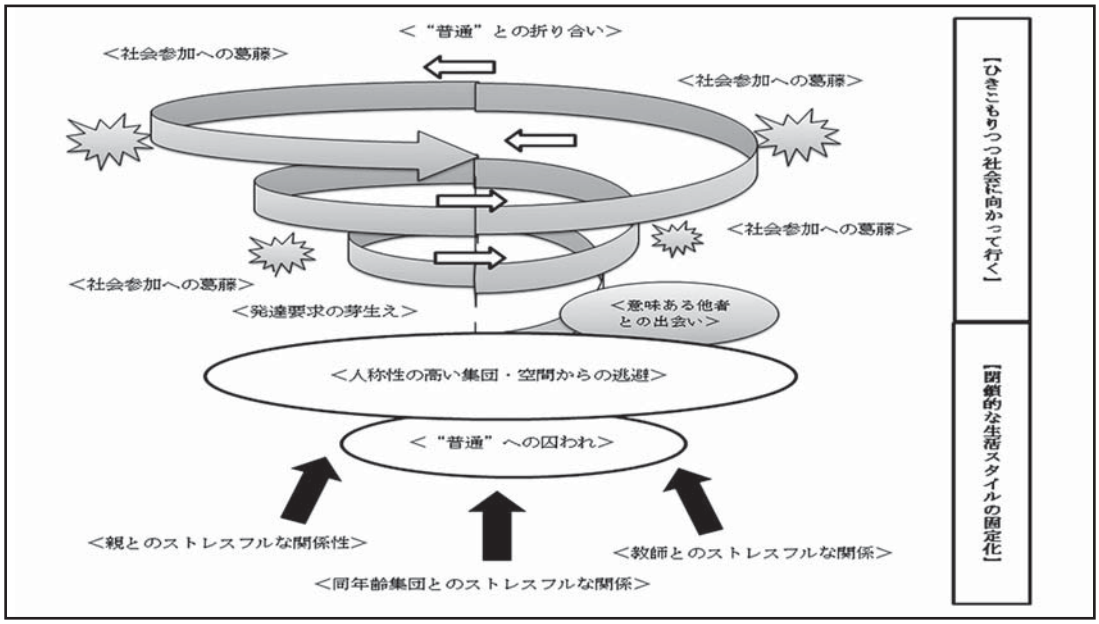

図 1. ひきこもりプロセス仮説図

らに，本稿において分析を進めるなかで，「親以外の大人とのストレスフルな関係性とひきこもりプロセスへの影響」という分析テーマを加える必要があると判断し，以上５つのテーマで分析をおこなった。そして，それをもとに仮説的図式化をおこなった。

3　ひきこもりのプロセス

ここからは，インタビューで得られた語りを概念化し，そこから仮説的に分析されたプロセスを提示する。本稿においては，ひきこもりのプロセスを大まかに①閉鎖的な生活スタイルが固定される，いわゆるひきこもるまでの段階と，②ひきこもりつつ，彼らが社会に向き合っていく段階の２段階に分けている。紙幅が限られているため，本稿では，ひきこもるプロセスについて簡単に概観したうえで，プロセスに特徴的だと思われる〈“普通”への囚われ〉に注目し，その内実を検討してみたい。

ストーリーライン

分析によって生成された概念をカテゴリー化し，プロセス図１を仮説的に作成した。また，そこで得られたストーリーラインを以下に示す。なお表記は，「」でくくられたものを概念，〈〉でくくられたものをサブ・カテゴリー，【】でくくられたものをコア・カテゴリーとする[5)]。

3-1　閉鎖的な生活スタイルが固定される段階

ひきこもる生活とは，他者とかかわることに距離をおき，閉鎖的な生活スタイルを確立，固定化していく生活である。A さんは，その生活について以下のように語る。

> 最初，仕事やめて１，２週間はずっと家にいて，正直，楽やなという気持ちのほうが強かったんです。何にも考えんでいいし。でも，気がつい

5）概念とは，一定程度の多様性を説明できる M-GTA における分析の最小単位であり，サブ・カテゴリー，コア・カテゴリーはそれぞれ各概念あるいは各サブ・カテゴリー同士の関係から生成されるまとまりである。詳しくは木下（2003 前出）図の２－12 を参照。

たら，ああ，もう外に出るきっかけみたいなんがなくて，出なあかんなあと思ってたらもう夕方になってて，じゃあもう次の日にしようというのが，もう延々と繰り返してたという。あげくにもう夜寝んと，朝来たら寝るという，眠いから，嫌な時間を寝てしまうという感じなんですけど，朝とか昼とかは外に出なあかんという気持ちが芽生える…，その時間を寝てしまったら嫌な部分を見んで済むという感じ。言いわけづくりなんですけど。

このような，【閉鎖的な生活スタイルの固定化】にいたるまでに，それぞれの若者たちは，彼らの育ちの過程において，他者との関係性を紡ぐ力の育ちが阻害されるような状況を経験している。その経験は大まかに，3つのカテゴリーにおいて説明できる。

1つ目は，〈親とのストレスフルな関係性〉における経験である。「介入的な親」のもとで生活してきた若者は，心理的あるいは身体的に強い介入を受ける。また，「親への安全感の欠如」を感じている若者や，「親への否定的感情」のなかで生活してきた若者もいる。F さんは以下のように語る。

低学年のころは叩かれてたなと思います。痛かった記憶はあるんですけど，詳しくは思い出せないです。ただ，目の前にいる人が手を振り上げると，無意識でこう，頭をかばってしまうようなことがあるんですけど。

さらに，「親のもつ“普通”への囚われ」によって，若者はありのままの自分であることに価値を見出せず，“普通”であることに縛られるようになる。たとえば，C さんは，「高校はやっぱり出てもらわないと」という親の思いのなかで，しんどさを抱えつつも高校に通い続けた。

2つ目は，〈同年齢集団とのストレスフルな関係性〉においての経験である。ひきこもる若者には，「同年齢集団との違和あるいは不調和」を感じた経験があるものが多い。G さんは以下のように語る。

班で一緒に発表するという課題が社会科であったんやけども，どうしてもよく休むからついていけないし。仲いい子もいないから，どうすればいいとも言えず，ただじっと座ってるので，最後とうとう同じ班の男子が，あいつ何もせんと来やがってみたいなんがあって，次の日からもう全く行けなくなりというのが，その不登校のきかっけみたいな感じです。

彼女の語りには，同じクラスという，基礎的な集団への参加が困難となるきっかけの1つが見て取れる。彼らは，自分がその集団にどう参加すればいいのか，どのようにすれば嫌われないのかと心配しながらも，参加しなければという強迫的な思いに囚われながら参加しようとする。そして，この過程において，気疲れや他者からの発言に傷つくなどの経験を経て，徐々に参加することへの恐怖が生じるのである[6]。このように，同年齢の他者と親密な関係性を紡ぐことに困難を感じ，同年齢の他者を恐れるなかで「同年齢集団の否定」が生じている。

最後に，〈教師とのストレスフルな関係性〉においての経験が挙げられる。彼らのなかには，教師の体罰やいじめととれるような心理的な攻撃によって，学校生活が困難になった者もいた。F さんは，以下のように語る。

1回，全校の生徒が集まって何か体操服に着がえてパレードかな，何かな，何かの練習をするような機会があって，そのときに全校生徒が集まったんですけど，僕はそのときに体操服を間違って妹のを持っていってしまったことがあって，そ

6）「『ひきこもり事例効果的アウトリーチ確立』に関する研究報告書」p.43。

れを先生に相談したら，忘れたのにうそついてそんなこと言ってるんやろうとか言われて，妹のを持ってきてるんやったらそれ着て出ろと言われて，ブルマをはいて，それに出たんですけど。

このような，3つのストレスフルな関係性のもとで，他者と関係性を紡ぐことに困難や苦痛を感じ，〈人称性の高い集団・空間からの逃避〉が生じてくる。ひきこもる若者はインタビューにおいて，教師や同年齢集団とのストレスフルな関係性のもとで，学校という建物に近づくことに恐怖を覚える，あるいは同じ学校の生徒がであるく時間帯において，彼らが居る場所に近づくことができなくなるなどの困難を語ってくれた。

3-2　ひきこもりつつ社会に向き合っていく段階

様々な関係性のなかで，若者の，他者との関係性を紡ぐ力の育ちが阻害され，他者との関係性を紡ぐことの困難，葛藤から，閉鎖性の高い生活スタイルが固定し，ひきこもる生活になる。その後，彼らは【ひきこもりつつ社会に向き合っていく】プロセスを経る。ひきこもる，あるいはひきこもりつつ社会に向き合っていく生活のなかで，彼らを苦しめる要素として〈“普通”への囚われ〉が問題化する。ひきこもる過程のなかで彼らは，「“普通”像から離れることへの不安」や，「“普通”ではないことへの焦り」を感じ，葛藤し，苦しみつつも，「“普通”を望んでいる」場合も見られる。また，「“普通”への囚われからくる他者との関係を紡ぐ困難」も生じる。彼らには，ひきこもる生活から少しずつ他者と関係性を紡いでいこうとする意思や要求を持ちつつも，ひきこもっていた経験，あるいは仕事をせずにいる自己を知られることなどの恐怖から，親密な関係性を築くことに困難を覚えることや，わざわざ自宅から離れたところまで行かなければ安心して友人と付き合えないことがある。このような葛藤に苦しみつつも，彼らは〈意味ある他者との出会い〉を経験する。D さんは以下のように語る。

（ミニセミナーで）思い切って自分はひきこもりでしたと言うたんです。そうすると，別に世間は優しかったというか，ああ，そう見えないですとか，頑張ってはりますねとかいうふうに言われたんで，それですごくまた心が軽くなったというか，ああ，大丈夫やねんなというふうに思えるようになったんで。

このような経験のなかで，不安をもちつつも社会で生活したいという思いが育まれ，〈発達要求の芽生え〉が見られるようになる。

そして，彼らは，彼ら自身の中に育ちつつある発達要求と，〈社会参加への葛藤〉の間で行きつ戻りつしながら，ゆっくりと〈“普通”との折り合い〉を行っていく。E さんは〈社会参加への葛藤〉を以下のように語る。

実際に仕事をしてるときのコミュニケーションじゃなくて，昼休みとか，ちょっと始業前とか終業前にちょっと仕事がなくて，待機してる時間とか，そういうときになかなか，僕自体はコミュニケーションをしたいという気持ちと恥ずかしいという気持ちが同居していて，恥ずかしいという気持ちのほうが勝っちゃうので，結果として何か自分を閉ざしてしまうような感じになってしまって… 要するに何とかしてうまくやろうということじゃなくて，自然にそういうふうになっていくということがなくて，なのでコミュニケーション能力をつけたいとか思うんですけれども，だから，そういうこと自体が不自然と言えば不自然なんだけれども，僕自身は変わらないから，それはしようがないかとも思ってるんですけど。

彼の語りには，仕事仲間となにげないコミュニ

ケーションを取りたいという要求と，恥ずかしいという思いのなかで揺れている姿が見て取れる。このように揺れつつ，彼らは，彼らを苦しめていた彼ら自身のなかの“普通”と折り合うなかで,「ひとまずの一歩」を踏み出すのである。また，このプロセスのなかで，親の育ちともかかわりながら「親に対する感情の柔和化」が生じる[7)]。

以上，ひきこもりプロセスについて簡単に述べてきたが，本稿では加えて，プロセスにおける〈“普通”への囚われ〉に注目し，詳しい検討を試みた。以下の章で，その点について記述する。

4　ひきこもる若者の語る“普通”

彼らの語りを読み解き，概念化・図式化する過程において，私たちは，〈“普通”への囚われ〉という状態が特徴的に見出されることに注目した。

ここで言う“普通”とは，個々人がそれぞれにイメージしている，自己のなかの“普通”像である。つまり，〈“普通”への囚われ〉とは，そのような，人々がそれぞれに自己のなかで抱いている“普通”というイメージに囚われていることを示す。〈“普通”への囚われ〉が強ければその分，自己は“普通”でなければならないと思いこみ，自己をその一元的な“普通”像と比べやすくなる。

しかし，そもそも“普通”の人などいるのだろうか。鶴田（2005）は，“普通”という概念は，あたかも基準があるように人々が取り扱っているだけで，実際には，「他者がそれぞれの異なった場面において，『変』だと特定した以外のものが『ふつう』である」に過ぎず，非常に漠然としたものであることを指摘する。また，好井（2006）も，“普通”という言葉が空洞化していることを指摘する。つまり，“普通”とは，各々が自分の中にもつ曖昧で漠然としたイメージであり，日常生活においてしばしば頻繁に使用されるが，そこに厳密な基準はなく，実際には“普通”の人など存在しないのである。また，“普通”のイメージは，Goffman（1963）にみられるように，そのイメージを抱く本人が生活する社会や文化に大きく規定されると考えられる。

以上のような，〈“普通”への囚われ〉は，誰のなかにも存在する可能性があり，ひきこもる若者やその親に限定される現象ではないだろう。しかし，〈“普通”への囚われ〉は，本研究の分析にあたって設定した２つの段階を通じて一貫して確認され，そのなかで彼らが様々な思いを持っていることが見出された。つまり，ひきこもるプロセスにおいて，〈“普通”への囚われ〉がどのような葛藤を彼らにもたらし，また再び社会に向かっていくプロセスの中でどのように彼ら自身が“普通”と付き合っていくのかを検討することは，彼らの内的世界をより理解するために重要な手がかりになると考えられる。

4–1　“普通”が使われる２つの文脈

〈“普通”への囚われ〉に限らず，彼らの語りのなかには，“普通”という言葉自体が数多く使用されていた。まず，本節においては，“普通”という言葉がどのような文脈で使用され，どのような意味をもつ言葉であったのかについて検討したい。

“普通”という言葉が使われる文脈は，大まかに2つのグループに分けることができる。1つは，主にひきこもる前の生活について語られる文脈で使用されるもの。もう１つは，他者とかかわることに違和や困難を覚えた時期以降の文脈で

7）ひきこもり研究において，親に対する支援の研究は徐々に重ねられてきているものの，今回の「親に対する感情の柔和化」に代表されるように，ひきこもる本人から親への思いや感情に注目する研究は少なく，萌芽的な研究領域であると言える。特に，この「柔和化」が「折り合い」にどう影響してくるかについて，より深めていくことが今後，重要な課題となるだろう。

使用されるものである。

たとえば，1つ目の“普通”は以下のように使用される。強調のため，“普通”という言葉に下線をつけて示す。

質問者：家に帰ってきてからも，お友達と遊ぶことが多かった。
C：はい，そうです。普通に遊びに行ったりはしてました。

B：普通に，一般的にみんなで，グループで鬼ごっこしたり。
質問者：ああ，そう。ピンポンダッシュなんかしなかったの。
B：ピンポンダッシュとか，そういう何か悪いことをするのとかも，いたずらとかも，みんなでするのも。

このように，ひきこもる前の時期に関して述べている文脈における“普通”という言葉は，その言葉自体に特に深い意味を含ませられることなく使われているようである。ひきこもる前の時点においては，“普通”という言葉は，本人自身を苦しめるようなものではなく，無機質なものとして使われている。

これに対して，もう1つの“普通”は以下のように使用される。

質問者：それは学校に行かなければいけないという思いが強かった。
E：強かったですね。
（略）
E：何か要するに将来に，将来のことまで考えてたのかな，でもやっぱり何というか，普通のスタンダードな道を外れたら，すごい苦労するんじゃないかとか，そんなことを思ってたのかな，

質問者：単刀直入にお尋ねしますが，34歳，35歳という年齢は，やっぱりかなり自分にとっては重荷ですか。
A：重荷ですね。
質問者：重荷ですか。
A：普通に考え，また普通って言葉が出てきましたけども，所帯持って，子どもができてという世代になるので，それと比べますんで，すごい重荷ですね。

他者との関係性を紡ぐことに困難を覚えた後の時期に関して語られている文脈では，“普通”という言葉の使われ方が変容する。彼らはひきこもるなかで，自己と“普通”像を比較し，“普通”像からどんどん離れていく自己の状態に焦り，苦しんでいる。

先に指摘したように，“普通”の人など実際には存在しない。しかし，それにもかかわらず私たちは，“普通”という言葉に敏感になる。私たちは誰でも，自分のコンプレックスに悩み，自分のコンプレックスの原因となる自分自身に敵意を抱き，嫌悪し，同情し，“普通”から外れていこうとする自分の状態に恐怖するのである（好井，2006前出）。ひきこもる若者たちもまた，他者との関わりにおいて強いストレスを感じ，他者との関係から自己を遠ざけていくような生活をつくりあげつつあるとき，ストレスから遠ざかりたいと思うと同時に“普通”から外れていこうとする自分の状況に恐怖し，苦しんでいるのである。

また，ひきこもる若者たちは，彼らの生活を徐々に他者に開いていこうとする段階にいたると，実際には到達することのできない“普通”との距離の間で，葛藤を抱えながらも，日常生活を営むなかで自己が持つ“普通”と対峙し，他者や社会に向き合おうとする。そのプロセスには，“普通”に囚われ，葛藤や焦りをもつ彼らの姿が見られるとともに，“普通”を問い直し，自分の価値観を模索するきっかけをも見出すこ

とができるのではないだろうか。例えば，A さんの語りには，“普通というのが何をもって普通というのかというのは”と，“普通”とは何かという問いかけが見出される。

4–2 〈“普通”への囚われ〉の諸相

本節において，さらに詳しく〈“普通”への囚われ〉について考えていきたい。〈“普通”への囚われ〉は，前章でも記述した通り，「“普通”像から離れることの不安」と「“普通”ではないことへの焦り」，「“普通”への囚われからくる他者との関係性を紡ぐ困難」，「“普通”を望んでいる」の 4 つの概念から構成されている。

4–2–1 “普通”像から離れることの不安

彼らは，他者との関係性を紡ぐことの困難を感じ，他者との距離を広げたいと思う一方で，“学校に行く”あるいは“友達がいる”，“仕事をしている”などの“普通”像から自分自身が離れることに不安を持っている。それが一番現れているのが，前節の E さんの語りである。彼は，ドミナントストーリーから外れると将来苦労するのではないか，という思いのなかで，いじめを受け，学校に行きたくないという思いを持ちつつも，強迫的に小学校に行き続けた。

高垣（2008）は，子どもや若者たちの「生存」や「尊厳」の条件を破壊する現代社会の競争を批判する。彼によれば，子どもたちは，振り分けをするための競争に，「おもしろくも楽しくもないけれど，それに参加しないと端から相手にしてもらえなくなるかもしれない，それが怖くて否応なく参加させられ」てしまう。つまり，競争主義が貫徹する現代において，学校に行くという“普通”のこともできなくては，生きていくことが困難になるかもしれない，という「生存」や「尊厳」が脅かされる恐怖に，現代の子どもや若者たちは取り囲まれているのである。そのような状況のなかで，E さんのように，学校に行きたくないという思いを抱えながらも，自分の傷つきを抑え込んで学校に強迫的に登校し，さらに自分を追い込む子どもたちがいる。

4–2–2 “普通”ではないことへの焦り

また，ひきこもる若者の中には，自己が“普通”から外れていると考え，焦るなかで自己を更に追い込む若者がいる。まず，特徴的だったのが，年齢についての言及である。前節の A さんの語りにも見られるように，“普通なら働いている年齢だ”あるいは“普通なら家庭を築いている年齢だ”という焦りのなかで，自己のペースで社会に向き合うことが困難になっている。特に，年齢が上がるにつれて，この漠然としたプレッシャーは強まる。この点は，ひきこもり支援において，支援者が敏感にならなければならない点である。また，“社会から強制されている価値観”のなかで苦しんでいる若者もいた。彼は，“社会から強制されている価値観”を相対化することができず，焦りを感じ，そこから解放されたいという思いを持っている。

このような焦燥の中で，若者たちは何かしなければと行動することがある。しかし，この焦燥が焦燥のままでとどまっている時点では，よけいに“普通”に縛られるばかりで，彼らが，自己と向き合い，自己のありのままを認めることは困難である。人は“普通”という空洞に囚われ，“普通”を追い求める限り，その囚われから抜け出すことはできない（好井，2006 前出）。焦燥の多くは，“普通”ではない自分はこのままではいけないんだ，という思いのなかで生じるが，ひきこもる若者にとって重要なのは自分自身のありのままを認め，“こうしなければならない”と抑制されてきた自己同一性から自己を解き放つことである。そして，このような解き放ちが支えられるなかで，彼らは今まで抱えこんできた人生の荷をおろし，今まで強いられてきた価値観や社会観では発見できなかった自己の

可能性を発見できるのである（山本, 2009 前出）。

4-2-3 “普通”への囚われからくる他者との関係性を紡ぐ困難

また，このような〈“普通”への囚われ〉は，彼らが他者と関わろうとするときにも障害として存在している。C さんは，サポステの就労体験において，自分と同じ経験をしてきた仲間に出会うことができた。彼は，自己の経験が「恥ずかしくて言えない」なかで，自分の周囲にそのような，同じ経験をしてきた仲間を見つけられずにいた。彼のように，自己の経験，あるいは状態が“普通”ではないと感じ，そのような自己に価値を見いだせず，自己を恥じる若者がいる。宮内（2005）は，Goffman のスティグマ論を再考するなかで，劣等感に苛まれる人々が，他者に対して自己を開示することに戸惑いを感じつづけてしまい，様々な日常生活の場面において情報操作を行い，他者との隔たりを感じるなかで孤独に陥ってしまうことを指摘する。ひきこもりの若者のなかには，美容院が苦痛となる若者が多く存在する。理由はいくつか存在すると考えられるが，F さんは以下のように語る。

> もう散髪に行くのが憂鬱でしょうがなくて，散髪してる人にはもう仕事している体を通してるんですけど，まあ相手も何となくわかってはいるのではないかなと思うんですけど，まぁつらいです。

このように，“普通”ではないと強く感じ，焦り，劣等感を抱える彼らにとって，様々な日常生活が困難となり，そのなかで，他者と親密な関係性を紡いでいくことも困難になっているのである。

4-2-4 “普通”を望んでいる

以上のように，彼らは〈“普通”への囚われ〉のなかで葛藤を抱えている一方で，強く「“普通”を望んでいる」。“普通”に囚われている若者は，ありのままの自己を認めることができず，“普通”に強い憧れを持つ。C さんは，“普通”に父親のようなサラリーマンのような，“何の問題もなく過ごしたい”という思いを強く持っていたと語る。つまり，彼にとって“普通”とは，何の問題もなく過ごすことができる状態として認識されていた。

“普通”に囚われる彼らは，より“普通”に近づけば，もっと楽に，穏やかな気持ちになれると考えているように思われる。例えば，“どんな状態になったら，苦しい状態から抜け出せたと言えますか”という問いかけに対し，A さんは，“普通に仕事して，普通に休みがあって，普通を望んでいるというところがあるんですけど”と答えている。しかし，結局のところ，“普通”は追い求めれば追い求めるほど，囚われ，到達することのできない漠然としたイメージであり，彼らは，到達することのできない“普通”を自己に要求しているのである。

しかし，実際に，彼らが望んでいる穏やかな心境に辿りつくためには，彼らは“普通”へ向かうのではなく，反対に，強い“普通”への囚われから少しずつ解き放たれる必要があるのである。そのために重要となるのが，〈“普通”との折り合い〉という概念である。

4-3 ひきこもる若者と“普通”との折り合い

4-3-1 〈“普通”との折り合い〉

これまでのところで，〈“普通”への囚われ〉の中でひきこもる若者の葛藤が深まることが見出された。そして，これに対して新たに彼らが他者と関係を紡いでいくために重要となるのが，〈“普通”との折り合い〉という概念である。

私たちは，社会で生活するなかで，マスコミやそのほかの情報媒体，他者との関係性のなかでつくられ，崩され，を繰り返す“普通”像を少なからず持っている。そして，私たちは各々，

“普通”と折り合いをつける，あるいは葛藤があったとしても忙殺される日々のなかでそれを直視せずにやりすごすなかで生活している。ここでは，“普通”と折り合えている状態を，社会・文化や自己の周囲との関係性を背景として自己のなかにつくりあげられる“普通”というイメージに葛藤が生じるほど強く囚われることなく，付き合っていける状態と定義する。D さんは以下のように語る。

> いや，でも人生いまだ別に何のために生きてるかわかってないです，僕は。自分，いまだに何やってんねやろうというふうに思うときしかないという。ただ，目標立てることで，その一歩一歩歩いていくという。

彼は，依然として葛藤を持ちつつも，「一歩一歩歩いていく」という思いを持っている。それは，彼が，様々な葛藤と向き合いながら，少しずつ自分らしく社会に参加していくやり方を獲得しつつあるということだろう。

このような，〈“普通”との折り合い〉において，青年期は，特に重要な時期である。青年期は，親への依存から少しずつ脱却し，他者との関係性を紡ぐなかで自己を社会に位置付ける時期である。そしてこの時期を，白石（2009）は「周囲への依存と拒否を繰り返しながら周囲との距離を新しくつくり直し，自らへの過大評価と過小評価を繰り返しながら『等身大』の自分を見出し」つつ「他者の意図や要求と自分の意図や要求との間に『折り合い』をつけられる新たな自我を確立する，他者との比較によってではなく自分自身の中に評価の軸をもつ，他者の価値観に触れつつ自分なりの新しい価値観を築くことによってのりこえていくもの」であると述べ，そこには大きな葛藤が生じると指摘する。つまり，青年期においては，周囲との距離を試行錯誤しながら掴み，自己の価値観を築いていく作業が必要となるのである。以下は，D さんの語りである。

> カウンセラーの方と会うて，一言目今の状況を言うたら，そうやね，しんどかったねと言われまして，涙出そうになりまして，今までそんな言われたことなかったんで，しんどかったねという言葉には。もう早よせえとか，そんなことしてたらあかんみたいなことばっかりは言われてても，しんどかったねというのだけは言われたことなかったんで涙が出そうになって。

彼は，カウンセラーとの間で，新しい他者との関係性をつくり，これまで自己が囚われていたものとは違った他者の新たな価値観に出会っていることがわかる。つまり，これまで抱えていた生きづらさを受けとめてもらう経験を経て，白石（2009 前出）が述べるような「等身大」の自分を見出していきつつあるといえるだろう。また，F さんは以下のように語る。

> （基金訓練での人とのかかわりのなかで）いろいろ学ばせてもらったなと思います。何かもうはっきりとは言えないんですけど，何かぼんやりと生きるってこういうことかなと。

“普通”と折り合いをつけるためには，他者との関わりや彼らの育つ場が非常に重要になる。そして F さんの「ぼんやりと生きる」という語りには，他者との関わりを通して今まで囚われていた生き方のイメージによる葛藤と，繰り返し折り合いをつけていく姿が読み取れるのではないだろうか。

4-3-2 〈“普通”との折り合い〉とひきこもり支援の課題

前の項では，ひきこもる若者の〈“普通”との折り合い〉の重要性について指摘した。本項では，

〈“普通”との折り合い〉という視点から実際のひきこもり支援について言及を行う。

佐藤（2005）は，“普通”への囚われを持ち，自分たちとは異なると彼らが考えている“普通”社会へ，足を踏み出すことをためらうひきこもる若者たちが，そのこだわりから解放されるためには，“普通”を問い直すことが必要であると指摘する。そして，彼は，この“普通”の問い直しのための居場所の２つの学びとして，①ひきこもりの若者たちが，自ら幻想的につくりあげている“普通”の社会像に圧倒されることなく現実の社会と出会っていけるようになるための，社会参加の学びと，②若者たちから就労意欲をそぎ取っている“普通”の仕事観を修復するための，心身を躍動させるような労働の基礎的経験という学びについて言及している。

また，山本（2009 前出）は，周囲との関係性のなかで抑制されてきた自己同一性から解き放たれるためには，安心して参加できる居場所や仲間が必要であることを指摘する。

ひきこもる若者のなかには，家族や同年齢集団などの，〈“普通”への囚われ〉のなかで少しずつ折り合いをつけるために重要な，意味ある他者としての役割を担う人々との間で強い葛藤を抱えてきた者が多い。加えて，子どもや若者は，親密な友人との関係において，友人の自己に対する新たな評価や判断に応じて，自己を評価し直し，自己を新しくつくりなおすことができると考えられる（竹内，1987）が，他者との関わりが極めて少なくなるひきこもる生活では，他者とのかかわりによって，自身のもつ“普通”を問い直す機会が極めて少なくなってしまう。そのため，彼らにとっては，少しずつ自身が囚われていた“普通”と向き合い，問いなおしていくために，仲間の存在が非常に重要となるのである。

このように，ひきこもり支援においては，彼らがひきこもる生活のなかで更に固着化させた“普通”への囚われを，いかに問い直し，少しずつこれまで強制されてきた価値観から解き放たれるなかで，どのように“普通”との折り合いをつけていくかが重要となる。彼らは，ひきこもりつつも社会と向き合っていく生活のなかで，〈社会参加への葛藤〉と出会いながら，少しずつ「ひとまずの一歩」を踏み出している。そのプロセスは決して一方向ではなく，揺れ動いており不安定である。しかし，安心できる環境や支えのなかで，彼らは葛藤を少しずつ乗り越えながら，否定していた自己の価値をもう一度見出すのである。

したがって，この点から現在のひきこもり支援を考えると，ひきこもり支援の一環として重視されている就労支援のもつ危うさが見出されるのではないだろうか。石川（2007）によれば，「対人関係を取り戻しても自助グループやフリースペースなどから一歩踏み出して働くことができない人々が目立ち始めたことと，折からの日本経済の低迷と若年無業者問題とが重なり合い，就労および経済的自立が強調されるようになり」さらには，2004 年に「ニート」が注目されるなかで当事者を就労へと押し出そうとする動きは一段と強まった。

ただし，就労とは，彼らにとって大きな”普通”という要素であり，彼らの内的葛藤に寄り添うことなくただ闇雲に就労を促すことは，彼らの中の”普通”への囚われを反対に強める危険性を持つ。もちろん，就労支援が悪いということではない。しかし，就労支援をゴールとみなす考え方の陥穽と，彼らなりの折り合いの中で，社会参加の形やタイミングを具体的にどのように位置づけていくか，ということが慎重に問われねばならないのである。また，そのなかで，ひきこもる若者自身が，新たな社会参加の形を創り出していく主体としての力強さ，可能性を持っていることも忘れてはならない。支援において，私たちは彼らとともに“普通”を疑い，

新しい働き方や学び方を模索する必要があるだろう。

5　おわりに

本論においては，ひきこもる若者たちのひきこもりプロセスを彼らの語りから検討し，そのなかで更に，彼らの葛藤と密接に結びついていると考えられた〈“普通”への囚われ〉に注目して分析を行った。また，この分析から，ひきこもり支援においては，“普通”の問い直しなどの取り組みのなかで，〈“普通”との折り合い〉が重要となることを指摘した。

最後に，本論のなかでは，〈意味ある他者との出会い〉や家族が持つ“普通”への囚われ，そして，“普通”への囚われを現代社会の競争との関係で言及することも十分にはできていない。〈“普通”への囚われ〉は，現代の若者に共通する「生きづらさ」と密接に関係するものだろう。高垣（2002）の指摘する「高速道路」のように，皆と同じペースで走りつづけることを強要するような生活のなかで，〈“普通”への囚われ〉は，ますます強まる。以上の点は，今後の研究でさらに検討を進めていきたい。

謝　辞

本研究を行うにあたり，インタビュー調査に協力してくださった地域若者サポートステーション，支援機関の利用者の皆さま，そしてスタッフの皆さまに厚くお礼申しあげます。

引用文献

Erik H. Erikson.（1959）*Psychological Issues Identity And The Life Cycle*. New York: International Universities Press. 小此木啓吾（訳）（1973）「『自我同一性』アイデンティティとライフサイクル」. 誠信書房.

Erving Goffman.（1963）*Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall. 石黒毅（訳）（2009）「スティグマの社会学――烙印を押されたアイデンティティ」. せりか書房.

「ひきこもり事例効果的アウトリーチ確立」に関する研究グループ（2011）「ひきこもり事例効果的アウトリーチ確立」に関する研究報告書. http://www.ritsumei.ac.jp/~kohei-y/lab/outreach.pdf（2012 年 3 月 20 日）

石川良子（2007）「ひきこもりの〈ゴール〉『就労』でもなく『対人関係』でもなく」. 青弓社.

木下康仁（2003）「グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践　質的研究への誘い」. 弘文堂.

草野智洋（2010）民間ひきこもり援助機関の利用による社会的ひきこもり状態からの回復プロセス . カウンセリング研究, *43 (3)*, 226-235.

厚生労働省（2010）ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン. http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000006i6f.html（2011 年 12 月 12 日）

宮内洋（2005）〈繋がり〉の再編. 好井裕明（編）「繋がりと排除の社会学」. 明治書店.

内閣府（2010）若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）報告書. 青少年育成. http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/pdf_index.html（2011 年 12 月 12 日）

桜井厚（2002）「インタビューの社会学――ライフストーリーの聞き方」. せりか書房.

佐藤洋作（2005）〈不安〉を超えて〈働ける自分〉へ ひきこもりの居場所から. 佐藤洋作・平塚眞樹（編）「ニート・フリーターと学力」. 明石書店.

芹沢俊介（2010）「『存在論的ひきこもり』論――わたしは『私』のために引きこもる」. 雲母書房 .

白石恵理子（2009）第 1 章　発達と生活年齢. 白石正久・白石恵理子（編）「教育と保育のための発達診断」. 全国障害者問題研究会出版部.

高垣忠一郎（2008）「競争社会に向き合う自己肯定感――もっとゆっくり／信じて待つ」. 新日本出版社.

高垣忠一郎（2002）「共に待つ心たち――拒否　ひきこもりを語る」. かもがわ出版.

竹内常一（1987）「子どもの自分くずしと自分つくり」. 東京大学出版.

鶴田幸恵（2005）いかにして「ふつう」の外見に駆り立てられるのか？. 好井裕明（編）「繋がりと排除の社会学」. 明石書店.

山本耕平（2005）社会的ひきこもりの背景と類型化に

ついて．大阪体育大学健康福祉学部研究紀要，*2*，23–37.
山本耕平（2009）「ひきこもりつつ育つ」．かもがわ出版.
好井裕明（2006）「『あたりまえ』を疑う社会学　質的調査のセンス」．光文社.

（2012. 1. 12　受稿）（2012. 3. 30　受理）